書評

齊藤哲郎『中国革命と知識人』

水羽信男

Ⅰ　はじめに

1920年代から今日に至る中国知識人と“革命”の問題を扱った本書には，彼ら・彼女らが紡ぎ出した「汲めども尽きぬ知恵」に学ぶ必要性を強調する著者の思想が貫徹している。著者は「官僚主義・拝金主義・カルト宗教」が横行しながらも，“先進国”意識に蝕まれ，ともすれば我国を除くアジア諸国の文化を低位に見なす現代日本知識人に，本書を通じて警鐘を鳴らしているといえよう。

こうした著者の問題意識から学ぶべき点も多いが，すでに評者はこの点を中心として本書の新刊紹介をしている（『図書新聞』2421号，1999年1月16日）。そこで本稿では野心的かつ論争的な本書の分析枠組・方法と実証を中心に紹介し，評者なりに本書と学問的な「格闘」を試みることで書評の責を果たしたい。なお本書の構成は以下の通り。

まえがき／前編：中国革命と左翼反対派｛序章，1章：中国の左翼反対派運動，2章：中国共産党と左翼反対派，3章：革命思想としての中国左翼反対派，4章：学問としての中国左翼反対派，終章：中国左翼反対派の歴史的意義｝／後編：知識人と政治｛1章：哲学と政治，2章：文学と政治，3章：主体性，4章：科学と人生観｝／あとがき。

著者は「思想が『時代の鏡』」として政治構造を描き出す歴史叙述を目指している（5ページ。以下，ページ数は本書からの引用を指す）。そのための分析枠組・方法が“政治思想史”研究であった。それは政治に関わる思想の研究という意味の外に，「政治史と思想史との交錯する場」を研究するという意図が込められている（3ページ）。著者は思想史を政治史の補足的な説明と位置づけるような叙述スタイルを峻拒し，他方，思想を現実政治から切り離し抽象的・超歴史的に議論する立場も否定しようとしたのである。

本書が政治思想史の具体的な主たる分析対象としたのが，20世紀のスターリニズムの宿痾ともいえる権力による知識人に対する“粛清史”であった。ただし本書においては，粛清されるに至る思想とともに，粛清をおこなった側の思想をも分析対象としている。著者は“粛清”の歴史をリアルに見つめることで，マルクス主義思想の再生を促す思想的営為を歴史的に探ろうとしている。それこそが拠るべき理念を喪失して，漂流し続ける現代世界に中国知識人が貢献しうる知的成果だと，著者は主張しているのである。

Ⅱ　本書の概要と学ぶべき点（1）

前編がとりあげる左翼反対派とは「トロツキー

派」の自称である。従来，正統的な左翼の間では，「トロツキスト」とのレッテルは「スターリニスト」と同様か，あるいはそれ以上の批判の意味を込めて用いられてきた。しかし1989年からの東欧・ソ連社会主義の崩潰を機に，トロツキーの思想を再検討しようとする気運が政治党派の枠を超えて，さまざまなレベルで始まっている。トロツキーの『裏切られた革命』や『文学と革命』が，岩波文庫へ収録されたことは，その一つの現われであろう。

本書はトロツキーの「永久革命論」を“崩潰した社会主義”の克服のために重要なファクターと位置づけ，革命運動の「良心」として高く評価する（序章・終章）。著者は「永久革命論」におけるマルクス主義の原則的立場——階級闘争・国際主義・世界革命の堅持が「規範」的役割を果たし，現実の革命運動が持つ負の側面を是正しうると断言したのである（131ページなど）。

こうして著者は未公刊のものを含む欧米・台湾・香港などの研究を吸収し，これまで日本の中国近代史研究者が十分に活用しなかったハーバード大学所蔵のトロツキー・アーカイブやスタンフォード大学所蔵の彭述之ペーパーなどを駆使した。本書は中国（大陸）や台湾の史料も活用しており，著者の研究文献・史料の精力的な蒐集は注目に値する。

本書は1920年代における誕生から現在に至るまで，中国トロツキー派の政治活動を詳細に描き出した（1・2章）。また中国トロツキー派の革命思想をレーニン，スターリンとの比較において捉え，伝統思想との関係からも考察している（3章）。中国社会史論戦において高い理論水準を示したトロツキー派の学問研究についても，実証的に明らかにした（4章）。

たしかに日本の学界状況を踏まえれば，菊池一隆「中国トロツキー派の生成，動態，及びその主張」（『史林』79巻2号，1996年3月）に研究上のプライオリティがある。また中国トロツキー派の研究を主たる目的としていないとはいえ，緒形康『危機のディスクール』（新評論，1995年）も，トロツキーの「永久革命論」を高く評価したうえで，陳独秀らの思想を分析している。率直にいって，こうした先行研究について著者が言及していないことに，評者は戸惑いを覚える。とはいえ本書は日本で初めての中国トロツキー派に関する専著であり，充実した内容を誇っていることも否定できない。

Ⅲ　本書の概要と学ぶべき点（2）

後編では中国共産党という唯一の前衛からは排除・攻撃されながらも，主観的にはマルクス主義の側に留まろうとした胡風（2・3章），あるいは接近しようとした馮友蘭（1章）を取り上げる。著者は胡風らの知的営為を戦後日本の「主体性論争」やルカーチら西欧マルクス主義の主体性論，さらには1980年代中国の「主体性論争」などと関連させながら論じた。著者は個人の主体性を重視することで，マルクス主義の再生を目指したのである。

たしかに本書も米国での研究が注目した反共主義者＝胡適・張君勱らに触れてはいる（4章）。しかしそれは主体的マルクス主義を構築するために，有益な視座を獲得するための素材として彼らの思想を論じたに過ぎない（312-3ページ）。著者には胡や張らの思想をマルクス主義以外の変革思想のオルタナティブとして位置づける視角や，中国思想史の豊穣な系譜を検討するために考察するという視点は相対的に弱い（水羽「近年の米国を中心とする中国現代知識人の思想史研究に関する覚書」『広島大学文学部紀要』55巻，1995年12月などを参照）。

とはいえ本書は「広義の中華ナショナリズム」という「時代精神」を共有しつつ，対立し影響を与えあった中国政治思想史の二大潮流に関する作業仮説を提示した。やや図式的ではあるが，本書に基づき両者の差を表にしてみると次のようになろう。

この著者の二つの思潮の構造に着目する分析枠組・方法は，従来の通説から自由に中国思想を捉えるユニークなものである。たとえば“事実と価値と

	科学派	人生観派
文化観	西洋文化重視 ＝近代性重視	中国文化重視 ＝伝統性重視
哲学傾向	プラグマティズム 事実＝科学と価値 ＝人生観との一致	新カント主義 事実＝科学と価値 ＝人生観との分離
世界観	客観性重視 因果律支配	主観重視 自由意志支配
具体例	丁文江・胡適	張君勱

の一致”という哲学的立場から，主観の働きを極大化し，現実と同一化しようとしてプロレタリア文化大革命（文革）を導いた毛沢東と，毛によって粛正された主体的マルクス主義派とを同じ思想潮流に位置づけている。著者は科学派が人生観派的な主体性重視の観点を組み込み，マルクス主義を変成させる可能性についても注目したのである。また文革を否定した鄧小平らが，1978年以後，主観＝「革命」イデオロギーを現実の社会主義建設から分離するという新カント派的な認識に基づき，近代化路線を押し進めたとした。著者の展望を敷衍すれば，鄧小平は中国共産党の独裁を前提としつつも，いわば人生観派的な思想的立場に立っているといえよう（279ページなど）。

こうした作業仮説は，中国思想史の流れの一面を鋭く指摘しうるものとして検討に値しよう。後述するように評者はこの仮説を全面的に支持しているわけではない。しかしながら，この二つの思想潮流に関するイメージの提起が，本書の最大の学問的成果だと感じている。

Ⅳ　批判的考察（1）
――もう一つの「時代精神」――

とはいえ文革を総体として批判・否定した1978年以後，なぜ中国共産党内部で民主化運動を進めた主体的マルクス主義派と，それを弾圧する官製マルクス主義派とが分岐したのか，という問いを著者は発していない。遡っていえば，胡風が1930年代から科学派内部において主体的マルクス主義を提起しはじめた要因についても論及されずにいる。

著者が思想構造の違いに論及しても，思想対立・分化の要因について説明しないのはなぜか。それはルカーチらの主体性論が議論の前提としたリベラリズムや民主主義というヨーロッパの知的伝統について，著者が十分な注意を払っていないことに起因していると評者は感じている。胡風らもまたリベラルな価値観の重要性を痛感し，民主的な主体的マルクス主義を構築し，スターリニズムに対置しようとしたのではないか。

いずれにしても著者はリベラリズム・民主主義について，思想的な問題としてはほとんど議論していない。しかし周知のように中国近現代史の基本的課題はナショナリズムの実現だけでなく，清末以来，リベラリズム・民主主義の定着を求める動きは，今日に至るまで脈々と継承されている。その意味でいえば，これらの「自由と平等」を求める思想も中国の「時代精神」の一つであった。科学的社会主義も，本来，この「時代精神」を実現する思想の一つの（あるいは最も優れた）バリエーションと位置づけうるものであろう。

リベラリズム・民主主義という，もう一つの「時代精神」との関係からも中国知識人と革命との“政治思想史”的関係を再検討する必要があると評者は考えている。そうした作業を通じて，科学派 ⇔ 人生観派という二元論的枠組を精緻化することが可能となるのではなかろうか。思想潮流の生成と分化のメカニズムを分析するために，よりダイナミックな方法的視座を錬成する必要があろう。

またリベラリズム・民主主義思想に対する関心の低さは，トロツキーの思想を革命運動の「良心」とする評価へ著者を導いたように思われる。しかし本書が指摘するように，異論を恒常的に作り出し排斥するスターリン主義的な党組織のいびつさもトロツキー派に内在していた（209ページ）。それゆえ極限状態のなかで権力奪取を目指す革命思想と，リベラリズム・民主主義の思想とをいかに擦り合わせるかが，今日重要な課題となっているのである。

Ⅴ　批判的考察（2）
――ナショナリズムと大衆――

著者のいう「時代精神」＝「広義の中華ナショナリズム」と中国の知識人との関係を著者はいかに考えているのだろうか。たとえば後編において著者は，ナショナリズムを思想的契機とする新儒者＝馮友蘭の思想を，伝統の革新を企図するものと位置づけた。そして馮のナショナルな立場を「主体性思想」の前提として議論を進めたのである（229ページ）。

また著者が中国における主体的マルクス主義者として高く評価している胡風は，抗日ナショナリズムの高揚のなかで，彼の思想的立場を明らかにした。総じて後編の諸編では，伝統回帰という思想傾向を含め，中国知識人にとってのナショナリズムという

思想的契機を，著者の標榜する主体的マルクス主義との関連で肯定的に捉えている。

しかしながら前編で著者は，トロツキーの「永久革命論」を高く評価したためか，ナショナリズムを「革命を歪曲し，歴史を逆行させる最大の要因の一つ」だと見なした（132ページ）。中国ナショナリズムについては，従来，日本帝国主義を打倒する抗日戦争の推進力として高く評価されてきた。しかし現在ではその国内における抑圧的側面（チベット問題など）だけでなく，その対外的な膨張主義的な側面も批判されている（中越戦争など）。こうした研究状況を踏まえたとき，中国のナショナリズムを手放しで評価しえないことはいうまでもない。

だが前編と後編とでは，ナショナリズム評価においてあまりに掛け離れ，トロツキー派の思想と主体的マルクス主義との革命思想としての関連性が十分説明されていない，という印象をもつ。それは本書のための書き下ろしである前編に対して，既出論文により構成される後編では「初出の原文の修正」を最小限にとどめたからであろう（351ページ）。この点に関して評者は，一冊にまとめる際には叙述の一貫性を保つための加筆・修正をして欲しかった。読者は既出論文の「固有の生命と発言権」を確認する必要があれば，原載誌を見るだろうからである。

そして評者は現在の著者の考えに最も近いであろう前編の立論――ナショナリズムを否定的に捉えたり，革命運動を具体的に指導するためのものであるべき「永久革命論」を運動から切り離しながらも，それを「運動の良心」とする著者の立場に，疑問を感じざるをえない（141・177ページなど）。中国の歴史と将来を考える際，ナショナリズムの根強さを無視して，理念としての「永久革命論」の正しさを一面的に標榜しても，政治と切り結ぶ政治思想の構築は困難だと考えているからである。事実，著者が明らかにしたように中国トロツキー派も，「永久革命論」を「民族主義の立場から，『誤解』」している（135ページ）。

とすれば知識人に求められている思想的課題とは，ナショナリズムを否定した「永久革命論」の理想世界を信奉することではなく，ナショナリズムを知的営為の動力とし，その負の側面をも引き受け，それと闘争し，その現われ方を変えうる政治思想を構築することであろう。

ナショナリズムを政治化するイデオロギーの有り様を重視する評者の観点は，丸山真男のナショナリズム論や，今日の中国知識人の議論に基づいている。だが同時に著者が1980年代の中国民主化運動を進めた知識人の全面西欧化論的傾向に対して批判的な眼差しを向け，ナショナリズム運動の一形態である伝統の内的革新の重要性を指摘したことにも刺激を受けている（231ページ）。本書後編が説くように，伝統を現代社会に役立つ形で変革しうるならば，その伝統の内的革新をも一つのテコとして，ナショナリズムの政治的表現の内実を民主的なものに変革しうるであろう。主体的マルクス主義とは，その試みの一つであるともいえよう。

また著者はプロレタリアートの指導権を前提とするトロツキーの毛沢東批判に従い，「貧農」に依拠することも「革命を歪曲し，歴史を逆行させる」ものと見なしている。たしかに中国共産党に見られた非プロレタリア的要素――過度な「均産主義」的傾向や，個人崇拝への傾斜などを批判的に捉える視点は，今日ではほぼ通説になっているといえよう。その意味でトロツキーの視点は正鵠を射ている。

しかしトロツキーがいうように，プロレタリアートのヘゲモニーのみを一面的に強調するならば，人口の圧倒的多数が農民によって占められ，労働者さえ旧い伝統の規制から自由ではなかった中国において，ヘゲモニーは結局は知識人を主体とするトロツキー派に掌握されることになるだろう。そうしたときトロツキーの説く「貧農」などへの教育・指導の重要性の指摘を，愚民観に基づく政治動員主義と区別しうる保障はどこにあるのだろうか。あるべき指導と同盟の関係を創り出す鍵は，いかにして革命運動内部で“個人の尊厳”などのリベラルな価値を守り，民主主義を実現するかに関わっていると評者は考えている。

またこの課題は，胡風が主体性を承認するのは，一体いかなる人びとなのか，という問いにも通じていく。中国知識人にとって，広範な「貧農」層の主体性を承認するか否か，彼ら・彼女らの権利をいかに保障していくかは，今日でもなお重い課題となっ

ている。そして現代日本においても，「貧農」を「大衆」と読み替えたとき，同様な問題が存在していると評者は考えている。たとえば“日の丸・君が代”を主体的な判断に基づき，隣人に熱心に強制しようとする「大衆」の増加に危機感を抱く知識人は，決して少なくないだろう。個人の主体性を承認することは，アプリオリにリベラルな価値を実現する民主主義の実現を意味するわけではない。主体性論にとって重要な一つの検討課題は，「大衆」をいかに思想的に位置づけるかという点にあろう。

とはいえこれらの問題群は，本書の成果に学びつつ，私たちが検討すべき今後の課題である。なお本書の研究上の意義を損ねるものではないが，上海が「孤島」と化したのを1941年以後とする（68ページ）等々，本書は通説とは異なる歴史理解も示している（通説での「孤島」化は1937-41年）。また呉晗を呉含とする（225ページ）等々，いくつかの誤記も残っている。その他，内容的に論及すべき点もあるが，すでに評者に与えられた紙幅は尽きた。著者および読者からの批判を期待しつつ筆を擱く。

（研文出版，1998年10月刊，A５判，352頁，6500円）